

■経営人間学講座 道場清規について

- ・今日、はじめて高い思想のお話をお聞き頂く方は「なんでそんなことを皆で唱和するのだ？」と感じると思われます
- ・道場と言うのは、道を学ぶ場。ここで言うのは哲学、思想、価値観。もう一つ言うならば「思考のモデル」を学ぶ場。道を学ぶ場の反対は何かというと、知識・技術を学ぶ場、つまり【能力教育】です。

この5つの意味の説明解説というものは必要がありますので、もちろん随時やっていきますが、むしろここで学んでいく過程で、ここに書いてある5つのどれかが自分の心と合致する時がくるのです。そこでこの5つの意味するところ、意図、背景、想い、願い、そして祈りといったものが自分のものになっていくのです。これが理解と確信の違いなのです。

1つ目 経営とは、経世済民の高い志しを、実行に移すことである

この「経世済民」とは、今日はこの詳しい解説はしませんが、ご存知の通り「経済の語源」となったもので、エコノミーではないのです。日本では経済という日本語を使います。この経済と言う意味は、**世を治め民を救う**というこの書いてあるとおりの文字の言葉です。その志は**目的**のことなのですが、高い志だということです。では**高い志**とは何でしょうか。しかもそれを**実行に移す**ことなのだと書いてあります。今日は表面のお話しかしません。

2つ目、経営とは、人間の究極の理想と目的を、実業の現場で実現することである

究極の理想と目的とそうではないものとは何だろう。**実業の現場で実現すること**だと書いてありますが、ここがすごいのです。どこか別のところでこの話をすれば、それは綺麗ごとなのです。どこかの宗教家やお坊様のお話を聞いていればいいことであり、我々はリアルなビジネスをやっていますから、この実業の現場で実現することです。**行動を伴う**ということなのです。

3つ目、経営とは、人間の持つ無限にふかい可能性に、確信の信を置き、 価値の創造に努めることである

この無限に深い可能性を人間は持っていると書いてあります。本当にそこに確信の信を置くと、自分に対しても無限にふかい可能性を信じ、そして目の前にいる部下に対して
も、この無限にふかい可能性を確信して部下を育てることができるということです。

そして、何をするのかというと新しい**価値の創造**に努めろとあります。株価を上げろとか利益を上げろとは書いていないのです。正確に言うならば利益とは利益（りやく）ということです。つまり、我々経営者は儲からなければいけないのです。いつかこのお話もいたします。

4つ目、経営とは、人間のもつ最も醜い力を、もっとも美しい価値に、

転換させることである

これは普通に綺麗ごとを言っている倫理道徳であれば、醜い力という言葉は出てきません。人間ってとっても綺麗です、この綺麗な心を活かしましょう、とは書いていないのです。もっとも醜い力なのです。それをもっとも美しい価値に転換させるのです。この醜い力というのは私のことと言いますと、認めたくない事実、私です。それに向き合うエネルギーを使って美しい価値に転換させるのです。ビジネスというのは泥臭い汚い駆け引きが渦巻く世界です。その汚いところだからこそ、とても美しい花が咲く、咲かせるべきだ、ということだろうと思います。

5つ目、経営とは、いかなる絶望的な境遇にあっても、

その中からつねに智慧と力と勇気を、奮い起こすことである

私たちは生きていく中で絶望的な境遇というものと向き合うことがあり、その時にこそ智慧と力と勇気を奮い起こすことである、とあります。智慧というのはここで学んでいただくことで、私が伝えられるかどうかはともかく、伝えたいと思っていることです。それから力です。この力というのはその智慧から出てくる力です。思想の力というものがあるのです。それから**勇気**です。勇気とは、最近使わなくなった言葉です。私たちが子供の頃は色々な漫画とかでも、勇気のある子、鉄腕アトムとかまさしくそうでした。うちの会社内でも2〜3年前からよく話している曾野綾子さんなどが、「最近の日本人は卑怯だ」

「卑怯な日本人が増えた」「人のせいにする」といった「誰かのせいにする」していると言われます。また「昔の日本人はそうでなかった」という言い方をされます。この卑怯を卑怯と感じなくなった日本人が増えてきたということ、もう一つ置き換えると「恥を知らなくなった」ということです。日本は面白いのです。「恥の文化」だと言われているのです。「そういうことをすることは恥ずかしいことだ」と言う風に親は子供を叱っていたのです。今は「有名になれ」「お金を稼げ」とかは言いますが、恥について伝えることが無くなってきました。ぜひ経営者の皆さんは、このようなことを社員の皆さんに伝えて頂け

ればありがたいと思います。これは日本にしかない独自の文化なのです。恥が無かったら、どこかの国のように何でもできます。どんな手を使っても、金儲けするための手段ということで平気でできるのです。

では道場清規を拝唱します。

私はこの場でこのようなお話をするにあたって、なぜこのようなお話ができる勇気が出てきたのかというと、実は今日もそうなのですが、お上人様がいらっしゃるという前提なのです。そうであるからこそ安心して皆さんの前でお話ができるのです。今日初めて2割くらいの方がお勉強にいらっしゃって、「まさか道場清規ってそんなものを唱和しないといけないのか？」と思われるかもしれませんが、ぜひご協力いただきたいと思います。皆さんご起立をよろしく願いいたします。先ほど申し上げましたように、自分に言って聞かせるということと同時に、もう一つあるのです。会社内で理念とか目的の唱和をされている会社があればおわかりの通り、周りの人と声が合うかどうかは実は重要なのです。自己に言って聞かせると同時に、でも周りの人のことも考えて、唱和した時の声は一人が喋っているように聞こえないといけないのだそうです。ここでの唱和がずれていると、「楠本さんの問題です」と私が叱られていました。事実、その通りなのです。ということは私の会社で私の社員が我社の理念や目的を唱和する時の声がずれていたりすると、それは私がいなければそこにいるトップの人間の何かがばらついているということなのです。このような意味で部分と全体の関係性ということも含め、そして自己に言って聞かせるんだということで、ご自分の為に唱和をしていただきたい。声を出すということは物凄く重要なことが含まれているのだそうです。それでは私が「経営人間学講座 道場清規」と言って「一、経営とは」の後に続いて唱和をお願いします。